

委託事業実施内容報告書

平成22年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【日本語指導者養成】

受託団体名 特定非営利活動法人多文化共生センター大阪

1 事業の趣旨・目的

現在、大阪市では国際結婚等により子連れで渡日、あるいは子どもの呼び寄せで渡日し定住する外国人の子どもが増えている。

それに伴い、渡日まもない子どもが学校生活で日本語環境に適応するため、また未就学児童あるいは中学卒業後渡日してきた子が高校受験をめざすために、より早く正確に日本語を習得することを目的として日本語教室に通うケースが増えている。しかし、需要が増加する中、外国人の子どもに対する地域での日本語指導法はまだ確立しておらず、子どもの受入ができない日本語教室がある。

このような状況を踏まえ、研修講座を実施し、子どもたちの迅速かつ正確な日本語習得を助けることのできる人材育成を図り、日本語教室へのボランティア参加を促すことで、より多くの子どもが日本語を学べる環境をつくることを目的とする。

2 運営委員会の開催について

【概要】 詳細は別紙参照。

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
5月17日	(特活)多文化共生センター大阪事務所	山田泉 新矢麻紀子 坪内好子 鵜飼聖子 中村満寿央 田中 裕子	・委員紹介 ・委員会実施について ・講座概要及び内容の説明 ・講座概要及び内容に関する意見交換	・広報手段、チラシの内容吟味 ・講座定員について ・講座内容について ・講座で目指すもの、目標設定。
7月20日	(特活)多文化共生センター大阪事務所	山田泉 新矢麻紀子 坪内好子 鵜飼聖子 東口千津子 中村満寿央 田中 裕子	・申し込み人数の報告 ・講座の進行について ・アンケートの内容 ・大阪市内の子ども向け日本語教室について ・講座修了証について ・アルバイトについて	・講座を始めるにあたって、確認が必要な内容について、議論した。具体的な進行方法やアンケートの内容などを決定した。
11月15日	(特活)多文化共生センター大阪事務所	山田泉 新矢麻紀子 坪内好子 鵜飼聖子 東口千津子 中村満寿央 田中裕子	・講座報告 ・講座評価 ・今後の展開について	・全 10 回の講座実施内容、参加人数、アンケート結果の報告。 ・講座終了後のボランティア参加状況の報告。 ・講座の評価

【写真】



3 養成講座の内容について

(1) 養成講座名

外国人の子どもに対する日本語指導者養成講座

(2) 養成講座の目標

- ① 日本で暮らす外国にルーツをもつ子どもたちの現状・背景を学ぶことで、なぜ子どもが日本にいて、どういう環境で暮らしているのかを理解する。
- ② 日本語指導の基本を学び、国語ではなく外国語として日本語を指導する方法を学ぶ。
- ③ 子どもの年齢により学習の仕方や目指すものが変わるので、小学生(低学年)・小学生(高学年)・中学生・高校生それぞれの指導法を学ぶことで、より幅広い年齢層の子どもの指導を目指す。
- ④ 母語支援について学び、子どもが母語や母文化を学習することの大切さを知る。
- ⑤ ワークショップで実際に考え、体験することで、学習内容の定着を目指す。
- ⑥ 講座最終回に大阪での教室紹介を行うことで、学んだことを生かし、日本語指導者として活動し始めるきっかけを作る。また、実際に教室で活動するメンバーと直接話をするすることで、疑問を取り除き、安心して活動を始められる土台を作る。
- ⑦ 目標ボランティア獲得数10名

(3) 受講者の総数 36人(1回のみ参加の聴講者含む。)

(4) 開催時間数(回数) 20時間 (10回)

(5) 参加対象者の要件

子どもに日本語学習支援に興味のある方、原則全回参加可能な方、終了後各教室で活動していただける方

(6) 受講者の募集方法

- ・チラシ(大学、国際交流協会、ボランティア協会、日本語教室等)
- ・当センターブログ
- ・メーリングリスト(こどもメール)

(7) 研修会場

弁天町市民学習センター

〒552-0007 大阪市港区弁天 1-2-2-700(オーク 2 番街 7 階)

(8) 使用した教材・リソース

各講師作成のレジュメ

(9) 講座内容

日時	講座名／学習内容	講師	受講者数
8月7日 14:00～ 16:00	『外国にルーツをもつ子どもの背景』	法政大学 キャリアデザイン学部 教授 山田 泉	27名
8月21日 14:00～ 16:00	『大阪の外国からの子どもの現状』	サタデイクラス 坪内 好子	22名
8月28日 14:00～ 16:00	『日本語指導の基本』	日本語教師 安田 乙世	26名
9月4日 14:00～ 16:00	『地域日本語教室の実状』	こども広場 教室運営者 鶴飼 聖子	26名
9月11日 14:00～ 16:00	『小学校低学年での対応』	大阪市日本語指導協 力者 宮阪 蓉子	23名
9月18日 14:00～ 16:00	『小学校高学年での対応』	西九条小学校 センター校教諭 松田 多枝子	24名
9月25日 14:00～ 16:00	『中学校での対応』	市岡中学校 センター校教諭 松田 和典	27名
10月2日 14:00～ 16:00	『高校での対応』	長吉高校 日本語指導担当 柳澤 勤	21名
10月9日 14:00～ 16:00	『母語支援について』	大阪府・大阪市母語 支援 ヴァニア・アラウジ	22名
10月16日 14:00～ 16:00	『外国からの子どもへの支援の具体化』	(特活)多文化共生セ ンター大阪理事 中村満寿央	22名

(10) 講座の評価

① 受講生に対するアンケート

毎回講座修了後にアンケートを実施した。アンケート結果は別紙、講座報告の各回〈受講者の感想より〉を参照。

② 実施主体からの研修内容結果評価

・受講者の関心は高く、話し合いや意見発表を求めても、積極的に意見交換がなされていた。すでに活動したことのある受講者も活動経験のない受講者も自分たちの経験をもとに意欲的に取り組んでいた。

・異なる先生方に講義を行ってもらった結果、それぞれの先生の手法や経験を聞くことが出来たが、センター校についてなど、基本的な内容の重複が見られた。ただし、母語支援に関してや、リライト・デリートなどの手法、よくある失敗談、子どもの抱える問題など、重複して何度も聞いてもらうことで、定着させたい内容もあったため、それぞれの先生が重要と考える内容をお話いただくことには意味があったと考えている。

・講座参加者は全回を通して、大幅に減ることがなく、32名の申し込み者のうち、23名(約70%)が7回以上講座に出席した。しかし、申し込みがあるにも関わらず1度も参加しない受講者や1度だけ参加して、来なくなる受講者もいたため、キャンセルの連絡をもらい、キャンセル待ちの受講希望者に受講してもらうなどの工夫が必要だと感じた。

・受講者のレベルが様々で、類似した講座に参加したことのある受講者も中にはいた。繰り返し講座を実施することで、幅広い層の関心を集めたり、知識を定着させたりすることは重要だが、今回のような基礎講座だけでなく、すでにボランティアを経験したことのある人や実際活動を行っている人たちに対するスキルアップ講座や意見交換、相談の場を設ける必要が見えてきた。

③ 実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

・今回の講座の記録をもとに、誰でも学習できるテキストの発行を検討している。地域の日本語教室に直接ボランティアの申し込みをし、講座を受講せずにボランティア活動を始めてくださる方は、外国人の子どもの抱える問題やルーツ、心のケアや母語の必要性など、ボランティアをする上で大切な基礎知識をもっていないことが多い。そのような新規ボランティア希望者や外国人の子どもの教育に興味のある人たちが、いつでも手軽に基礎を学べる資料を作成し、外国人の子どもの背景や支援方法の知識をもつサポーターを増やしていきたいと考えている。

(11) 事業の成果

① 他事業との連携

当センターで運営している「多文化な子どもたちへの学習支援教室～サタデイクラス」の見学希望者を募り、ボランティア参加を促した。

② 研修後の人材活用

- ・サタデイクラスに3名見学者があり、そのうち2名はすでに活動に参加してくれている。1名は来年3月の退職後に活動したいとのことで、サタデイクラスか他の教室のうち、幼い子どもの数が多い方で活動をしたいとの連絡があった。
- ・サタデイクラスでの活動だけでなく、他の地域の日本語教室でも活動してもらえるように、問合せのあった人には情報提供や教室の紹介を行った。教室を紹介した受講者から地域の子どもの向け日本語教室の見学に行くことにしたという報告をもらった。
- ・すでに活動を行っていた、吹田市国際交流協会から、講座の内容を日本語ボランティアで共有し、今後の活動について話し合ったという報告を受けた。

(12) 今後の課題

講座に申し込みのあった、33名のうち、14名は今まで日本語指導の経験がない初心者だった。講座を通して、最終回のアンケートでは、13名の受講者が「ボランティア経験がない」と回答しており、その13名のうち12名がぜひ活動してみたいと答えている。しかしながら、結果的にボランティア登録者はサタデイクラスに3名と、最終回の教室紹介の際に案内したこどもひろばへ1名の合計4名のみとなった。教室見学の申し込みの際に、実際見学に来ていた申し込み者が、はじめていく教室に一人で行くのは緊張すると言っていたことから、講座で話を聞いていても実際に活動につなげるには勇気がいるということが分かった。

このことについて、運営委員会で話し合った結果、今後このような講座を実施する際には、講座の途中で何度か実際の活動の場に足を運び、子どもたちと触れ合いながら、講座で学んだことを実践にうつすとともに、実践の中でさらに課題や疑問点を見つけてもらい、もう一度教室で講座を受けることで、実際の活動と講座をリンクさせていく方がいいのではないかと考えが生まれた。

また、家から遠い場所で活動するためには、交通費など、ボランティアの負担が大きめという意見もあったため、大阪市だけではなく、大阪府下の教室の紹介も必要であることが分かった。

また、すでに活動経験のあると回答した7名のうち、「大変役に立った」と回答したのが3名、「役に立った」と回答したのが3名、「どちらともいえない」と回答した人が1名いたことから、経験者やすでにこのような講座を受けたことのある人を対象にさらに発展的な講座を実施する必要性も見えてきた。

受講者の経験やレベルに合わせて、講座の内容を工夫していくことが今後の課題の一つである。また、このような講座を繰り返し実施し、実際に活動してくれる人を増やすことで、これからも一層外国人の子どもたちへの教育が充実していくことを願う。

◆◆◆運営委員会◆◆◆

第1回 運営委員会
日時：2010年5月17日（月）
場所：特定非営利活動法人多文化共生センター大阪事務所
出席者： 山田 泉（法政大学教授） / 新矢 麻紀子（大阪産業大学准教授） 坪内 好子（サタデイクラス） / 鵜飼 聖子（こどもひろば教室運営者） 中村 満寿央（多文化共生センター大阪 理事） / 田中 裕子（多文化共生センター大阪）
<p>■委員紹介</p> <p>■今後の委員会の実施予定について</p> <p>■チラシ</p> <p>◇チラシの内容について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・誤解を招くような表現は避ける。「日本語教育」や「日本語ボランティア」という表現は「外国人の子どもの日本語学習支援」という表現に変える。 ・チラシに講座修了後各教室で活動して頂ける方という記述を加える。 ・講師名の敬称「氏」をはずす。 ・文化庁の事業なので、チラシに文化庁の委託事業であることを記載する。 ・分かりやすく簡潔に。曖昧な表現を避けて書く。「日本語教室」という表現は学校の日本語教室と混同してしまうので、「地域の日本語教室」という表現に改める。 <p>◇チラシの配布先</p> <p>新しい人材の開拓・知らない人に知ってもらえるような場所にチラシを配布する。</p> <p>例) 大学、生涯学習センター、ボランティア協会、国際交流協会、等。</p> <p>◇定員について</p> <p>講座の途中で人数が減ることも考えられるので、定員は30名とする。</p> <p>■講座内容について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの学習支援に携わりたいと思わせるような講座を作りたい。 ・講座のすすめ方・具体的な内容は講師に任せる。 ・参加型のもの(ワークショップ、ケースワーク、グループディスカッション等)を毎回の授業で盛り込む。 ・楽しいところや今の仕事のやりがいも盛り込んで話してもらい、参加者の恐怖心を取り除くとともにモチベーションを上げる。(子どもから得たもの、自分にプラスになったもの) ・こころの問題・背景・ケアの問題、支援をしていく上での心がまえの話。(第1回山田先生の講義) ・ロールモデルを見てもらう機会を作る。(第9回 vania さんの講義) ・最終回でボランティア登録会等を行うので、日本語教室への参加呼びかけをする。 ・講座資料は各講師のレジюмеをファイルに挟んでいけば1冊のテキストになるようにする。1章から10章まで目次を田中が作成しておく。 <p>■講座の目標</p> <p>◇ボランティア10名獲得。</p>

第2回 運営委員会
日時：2010年7月20日（火）
場所：特定非営利活動法人多文化共生センター大阪事務所
出席者： 山田 泉（法政大学教授） / 新矢 麻紀子（大阪産業大学准教授） 坪内 好子（サタデイクラス） / 鵜飼 聖子（こどもひろば教室運営者） 東口 千津子（学校法人山口学園 ECC 社会貢献センター代表） 中村 満寿央（多文化共生センター大阪 理事） / 田中 裕子（多文化共生センター大阪）
<p>■申し込み人数の報告</p> <p>◇定員の30名に達した。</p> <p>◇ボランティア経験者と未経験者は半々程度。</p> <p>◇応募があるにも関わらず、来ない人もいるかもしれないので、定員以上に募集する。（名簿上は32名登録）</p> <p>■講座の進行</p> <p>◇講座参加者にはファイルを配布する。毎回の講座に参加すれば、1冊の本になる。</p> <p>休んだ場合は、次の回出席したときに資料を配布。1人1部のみ配布。</p> <p>◇13：45～15分間先生と打合せ。</p> <p>◇講座受講者には名札をつけてもらう。</p> <p>◇休憩時間等は各先生方の都合に合わせる。</p> <p>◇16：30完全退室。</p> <p>だらだらと質問が長引かないように、区切りをつける。</p> <p>◇7割以上出席の参加者に修了証を出す。</p> <p>■アンケート内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1回目には講座情報の入手方法を聞く。 ・10回目には10回の講座を通しての感想を聞く。 ・1回目から10回目までを通して、講座の理解度、満足度、感想を聞く。 <p>■最終回ボランティア登録会の参加団体について</p> <p>◇ひまわり会</p> <p>◇サタデイクラス</p> <p>◇YWCA 多文化子どもプロジェクト</p> <p>◇こどもひろば</p> <p>■会場アルバイト</p> <p>◇プロジェクタや資料の配布</p> <p>◇受付</p> <p>◇記録</p> <p>◇名札・アンケートの回収、後片付け</p>

第3回 運営委員会

日時：2010年11月15日（月）

場所：特定非営利活動法人多文化共生センター大阪事務所

出席者： 山田 泉（法政大学教授） / 新矢 麻紀子（大阪産業大学准教授）
 坪内 好子（サタデイクラス） / 鵜飼 聖子（こどもひろば教室運営者）
 東口 千津子（学校法人山口学園 ECC 社会貢献センター代表）
 中村 満寿央（多文化共生センター大阪 理事） / 田中 裕子（多文化共生センター大阪）



■ 講座の報告

◇ 講座の出席人数、実施内容、講座の様子の報告

・ 受講者の総数 36名（聴講参加者含む） ・ 受講登録者数 32名 ・ 平均出席人数 23.9名

◇ アンケート結果の報告

◇ 講座を見学した委員から講座の様子の報告

■ 講座の評価

◇ 講座終了後のボランティア参加状況

第1回の運営委員会では10人のボランティア参加を目標に掲げていた。実際の参加者は以下の通り。

【サタデイクラス】

・ 見学者3名。うち2名はサタデイクラスに登録、1名は来年退職後に検討するとのこと。

【こどもひろば】

・ 見学者1名。登録はあったが、当分忙しいとのこと、参加がない。

【その他の地域】

・ 高槻市で活動をしたいという方に、高槻市の子ども向けの教室を紹介。見学に行きますとの報告があった。

◇ 課題

- ・ 実際に活動につながった参加者の数が少ない。
- ・ 参加者にボランティア経験者が多いため、ステップアップ講座の必要性。

■ 今後の展開

◇ 講座記録の利用について

今回の講座の内容・記録をもとに、ボランティア参加希望者向けの学習テキストを作成する案が出た。

◇ 新たな講座の実施について

今回の講座の反省点を踏まえて、同様の講座を開いては？という意見があった。講座の案としては、以下の2件。

- ・ すでにボランティアを経験している人向けの発展的な講座。
- ・ 講座の中で教室を訪れ、実践と講義を何度か繰り返す講座。

◆◆◆講座報告◆◆◆

第1回 外国にルーツをもつ子どもの背景	
日時	平成22年8月7日(土)14:00~16:00
参加者数	27人
講師	山田 泉



■あなたは何人（なにじん）という問い

◇アイデンティティの危機 ◇異文化という言葉 ◇帰属文化と世界の見方

■多文化クイズ<グループワーク>

■事例から文化の相違とその克服法を考える<グループワーク>

■帰属社会の文化と自分

◇違和感はどこから生まれるのか

■文化の定義

■言葉によって見える世界

■日本語を教えるということ

◇言語による心理的支配・被支配 ◇見える存在から見えない存在に~同化

◇親子・家族間のコミュニケーション不全

☆グループで多文化クイズを通して、異文化について学びました。

☆学校で起こった問題に関して、職員会議に参加しているつもりでグループでの意見交換を行いました。『各学校』の『校長先生』から意見を発表してもらいました。

<受講者の感想より>

➤ この講座をどこで知りましたか？：

チラシ 10名 メーリングリスト 5名 ウェブサイト 1名 その他 11名

➤ 理解度：理解できた 12名 だいたい理解できた 12名 半分くらい理解できた 3名

➤ 満足度：満足できた 17名 まあまあ満足できた 8名 どちらともいえない 2名

・グループで1つの問題に対して色んな見方・考え方が聞けて勉強になりました。山田先生の話はすごく深く、でも理解するには難しく思いました。

・身近に外国人の数が増えてきたので、ものの見方を変えてみる必要性が少し見えてきた。

・10回連続シリーズ講義初回だったので、グループでのワークショップは緊張がとける良い機会となり良かった。講師自らが経験してきた事例が豊富で理解しやすかった。もう少し時間が長ければ良かった。

第2回 大阪の外国からの子どもの現状	
日時	平成22年8月21日(土)14:00~16:00
参加者数	22人
講師	坪内 好子



■はじめに

◇外国からの子どもとは ◇帰国・来日の子どもとは

◇大阪市に住んでいる外国の子どもの割合

■外国からの子どもの状況

◇日本生まれの子ども ◇小学校年齢で帰国や来日した子 ◇就労目的の保護者と来日した子

◇日本に来てから家庭関係を作っていかなければいけない子

◇文化の幅を広げ豊かにしてくれる子どもたち

■学校での支援

■地域での支援

◇日本語支援 ◇母語・母文化支援 ◇教科学習支援 ◇カウンセリング&リラックス

◇情報伝達 ◇教育相談

■学校と地域でどうつながるか

☆センター校の紹介ビデオを鑑賞しました。子どものインタビュー映像もあり、子どもたちの話している様子をみんなで見ました。

☆子どもたちへの支援について、みんなで思いを話し合いました。

<受講者の感想より>

➤ 理解度：理解できた 12名 だいたい理解できた 11名

➤ 満足度：満足できた 11名 まあまあ満足できた 10名 どちらともいえない 1名

・まず、大阪市内にたくさんの日本語支援を必要とする子どもがいることに驚いた。もし自分が、将来結婚をして家庭をもち、地域社会の一員として活動することになってそのような子どもが近くにいたら、その子どもに対するケアのみならず、その子どもの保護者に対してもケアを行っていきたくと思いました。

・大阪の外国からの子どもの現状についてはよく分かったが、もう少し日本政府の政策面はどうなっているのかが知りたくなった。

・日記を使って表現力や文章力を伸ばすというのはとても良い方法だと思いました。

第3回 日本語指導の基本	
日時	平成22年8月28日(土)14:00~16:00
参加者数	26人
講師	安田 乙世
	
<p>■外国人の子どもが感じる日本語の難しさ</p> <p>◇来日年齢による違い ◇母語による違い ◇漢字圏と非漢字圏による違い</p> <p>■日本語指導の項目</p> <p>◇発音 ◇文法 ◇日本語独特の考え方、表現 ◇具体的な指導のヒント</p> <p>■基本の「き」、分かりやすい日本語を使いこなす技術</p> <p>◇分かりやすい日本語とは何か？分かりやすい日本語に言い換える10のコツ</p> <p>◇会話のキャッチボールのための質問の仕方</p> <p>◇言語外コミュニケーションを使う</p> <p>■日本語指導に影響する要因</p> <p>◇生活言語と学習言語 ◇母語保持 ◇学習者を取り巻く環境 ◇関係者との連携</p> <p>☆ワークを通して、文字を図形として捉えてしまうことはどういうことか疑似体験しました。</p> <p>☆短い文章を分かりやすい日本語に言い換える練習。普段使っている関西弁の表現を学習者に伝えるにはどうしたらいいのかを受講者それぞれが考えました。</p> <p><学習者の感想より></p> <p>➤ 理解度：理解できた 20人 だいたい理解できた 5人</p> <p>➤ 満足度：満足できた 20人 まあまあ満足できた 5人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・もっとこの様な具体的な教え方が学べるチャンスを作ってください。 ・中味が濃かったなので、もう少しゆっくりの説明と考えられる時間があればと思いました。 ・そぎ落とされた日本語で話すコツなど、やさしい日本語で説明することを心がけます。外国語として教える心がまえ、音と表記をいっしょに必ず言っていくことなど、とても大切なことを学べてうれしかったです。 ・本当に楽しく勉強させていただきました。日本語を外国語として捉えていろいろ考えていく度に「外国人の子どもたちはこういう風にかんじているんだなあ〜」と新しい発見がたくさんありました。日本語を外国語として、今までとは違った視点で勉強して行きたいと思います。 ・渡日の子どものための指導に四苦八苦した時には、クラス全体を巻き込むということが大切！簡単なことでしたが、改めて気づきました。 	

第4回 地域日本語教室の実情	
日時	平成22年9月4日(土)14:00~16:00
参加者数	26人
講師	鵜飼 聖子



■地域日本語教室の機能

- ◇定住外国人にとっての日本語教室とは
- ◇子どもたちにとっての日本語教室とは
- ◇ボランティアにとっての日本語教室とは

■子どもたちを知る

- ◇激変した環境（喪失体験）と異文化体験
- ◇生活の中心は学校
- ◇適応の課程の途中
- ◇アイデンティティの危機

■実際の活動

- ◇信頼関係づくり
- ◇それぞれのニーズに合わせる
- ◇親もサポート

■地域日本語教室の役割

◇学校ではないもう一つの場所＝居場所としての役割

◇時間の経過とともに課題の変わる子どもたちと寄り添う

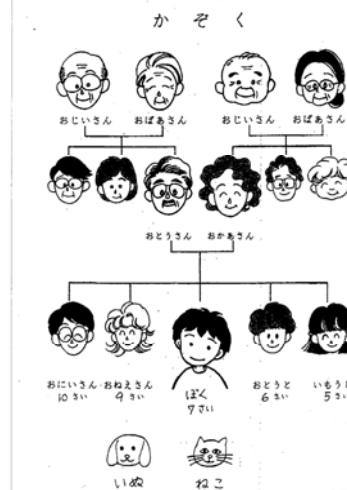
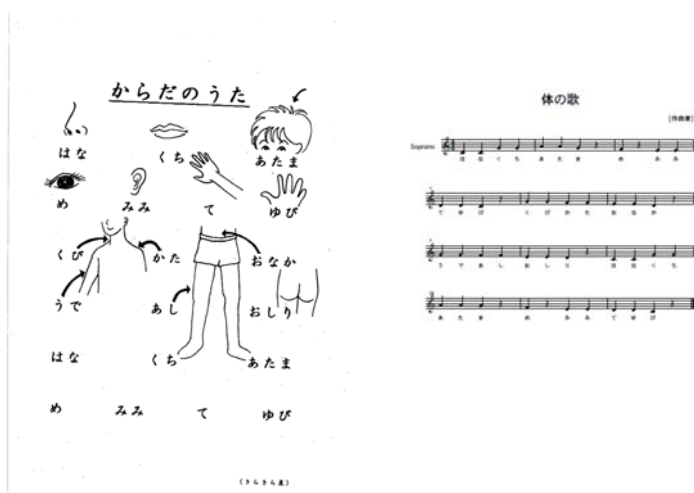
☆子どもたちが生まれてから成長する過程で出会う人たち（親・親戚・先生・友達…）を全員で考えました。子どもたちが実際に出会ってきた人の多さと一度にすべての人間関係を失う喪失体験を実感しました。

☆夏休みのしおりと数学・英語の問題をグループに分かれて考えました。子どもたちに分かるように説明するにはどうしたらいいのか、グループごとに話し合っ発表しました。

<学習者の感想より>

- 理解度：理解できた 11名 だいたい理解できた 12名
- 満足度：満足できた 9名 まあまあ満足できた 11名 どちらともいえない 3名
- ・活動の生の話が聞けて良かったです。先生の強い信念が伝わりました。自分の地域でぜひ初めたいです。立ち上げの話もいつかお願いします。
- ・子どもたちに勉強を教えるだけでなく、日本で希望を持って暮らせるようなサポートが大切だと感じました。
- ・日本語教室の意義についてはこれまでの講義で十分理解できましたので、教室の抱えている問題点について、具体的に困っていることなどについて知りたかったです。
- ・日本語指導と生活指導の両立の必要性を感じた。

第5回 小学校低学年での対応	
日時	平成22年9月11日(土)14:00~16:00
参加者数	23人
講師	宮阪 蓉子



■低学年生徒への日本語指導

◇小さい子どもは早く日本語を覚える ◇低学年での来日問題と留意点

◇日本生まれの児童について

■何をどのように教えるか

◇口頭で話す聞くを中心に ◇テキスト・指導項目 ◇具体的な指導方法～教材の使い方

■文字指導について

◇学校での文字指導 ◇第二言語としての日本語の文字指導

◇文字を書く練習→日本語の定着

■まとめ

☆受講者みんなで教材の活用方法を学びながら、歌を歌いました。

☆作文指導の具体的な方法として、4コマカードや4コマ漫画を紹介していただきました。

☆すべて、体験させて覚えてもらう。味覚の勉強の時に使う小道具（塩・砂糖）なども教えてもらいました。

<受講者の感想より>

➤ 理解度： 理解できた 17名 だいたい理解できた 3名

➤ 満足度： 満足できた 19名 まあまあ満足できた 1名

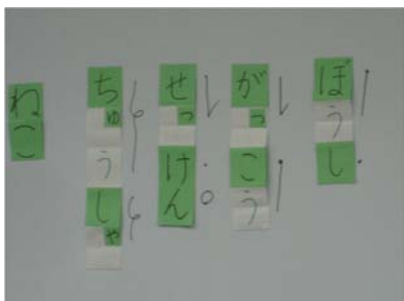
・実際に教室で使われている歌やゲームなどを教えていただいたのが良かった。これから役に立ちそうだと思う。

・子どもへの日本語を教えるにはまた一つテクニックが必要だと思った。

・実例が豊富で私自身も意欲がわきました。

・子どもと向き合っの豊富なご経験から貴重な数々のテクニックをご説明いただき、非常に感激しました。子どもだけではなく大人にも十分生かして使える教材もご紹介頂いてとても参考になります。

第6回 小学校高学年での対応	
日時	平成22年9月18日(土)14:00～16:00
参加者数	24人
講師	松田 多枝子



(写真左) 文字と音を一致させるためのカード。手を叩きながら、一文字一拍を理解する。

(写真中央) カードを使つての助詞の学習。主語・述語で色を変えて、文章を組み立てる練習。

■帰国した子どもの教育センター校とは

■帰国・来日児童について

■帰国・来日児童への日本語指導

◇生活言語～顔の表情・ジェスチャー・行動 ◇学習思考言語～抽象的・概念的

◇主な教材紹介

◇教科学習への移行を支援する教材開発～リライト・デリート教材

■在籍学校担任と共に学ぶ研修会

■母語保持の支援

■その他適応指導

◇異文化理解、在籍校へ伝える役割 ◇子どもたちへの指導～日本のルール、常識を伝える

☆グループワークでは、先生が実際かかわっていらっしゃるお子さんについて詳しく説明していただき、彼女に対してどんなサポートができるかを考えました。学校では難しい、ボランティア教室だからこそできる支援のアイディアの発表もありました。

<学習者の感想より>

➤ 理解度：理解できた 17名 だいたい理解できた 6名

➤ 満足度：満足できた 15名 まあまあ満足できた 8名

・個々人の宗教を尊重した上で日本のしつけもしっかりするという目からウロコでした。“しつけ”も押し付けになるんじゃないかと思っていました。学校現場で先生方が非常に苦労されているのが分かりました。“一定の距離を置く”ということも勉強になりました。

・学校でのことを大事に、プラス学校ではできないことをやろうと思います。教材をたくさん教えていただき、よかったです。

・カードを使って「は」「を」「に」を教える方法はぜひ使ってみてみたいです。

・いろいろなケースがあるので、それに応じた対応を考える必要がある。そのために学習面、精神的にサポートするいろいろな方法を学ばないといけないと思いました。

第7回 中学校での対応	
日時	平成22年9月25日(土)14:00～16:00
参加者数	27人
講師	松田 和典
<p>■帰国した子どもの教育センター校 日本語教室の概略</p> <p>■センター校日本語教室では・・・</p> <p>◇修了目標～日本語能力試験3級 ◇少人数制指導 ◇漢字の壁</p> <p>◇学校と家庭の中間地点</p> <p>■在籍校では・・・</p> <p>◇日本語学習と教科学習の大きな差 ◇友達づくり ◇教師も楽しむということ</p> <p>◇居場所づくり</p> <p>■母語保持について</p> <p>◇母語保持の重要性 ◇母語教室の役割</p> <p>■帰国・来日生徒の進路</p> <p>◇将来の目標 ◇高校進学 ◇特別枠入試と配慮事項 ◇就職</p> <p>■生徒の例</p> <p>◇実際に関わった9人の生徒の例</p> <p>■地域の日本語教室で</p> <p>◇100ある問題のうち1つを受け持つ気持ちで</p> <p>☆教室での様子や子どもたちの様子をスライドで紹介していただきました。先生と一人一人の信頼関係やつながりを感じることができました。</p>	
<p><受講者の感想より></p> <p>➤ 理解度：理解できた 15名 だいたい理解できた 7名 半分くらい理解できた 1名</p> <p>➤ 満足度：満足できた 7名 まあまあ満足できた 14名 どちらともいえない 1名</p> <p>あまり満足できなかった 1名</p> <p>・たくさん事例があってよかった。もっと教え方の話があればよかった。</p> <p>・教科学習のことや進路指導のことなど、もう少し実践的なことをお聞きしたかったと思います。</p> <p>・厳しい状況にある外国人生徒に良さがある。その良さを引き出したり、認めたりできる日本語教室の先生の姿勢が素晴らしいと思いました。それだけ子どもたちに寄り添って、また親とも向き合ってやってこられたのだろうと思います。</p> <p>・様々な学習者がいて、様々な環境の人がいるので、最後におっしゃっていたように100のうち1つでも自分が手助け出来たらという思いでかかわることが大切なのかなと思いました。</p> <p>・個々人のケースをたくさんご紹介いただき、皆さんが非常に苦労しつつも懸命に生きている様子が分かりました。現在は地域の日本語教室で大人の方を対象にボランティアをしています、子どもへの学習もサポートしたいと思いました。</p>	

第8回 高校での対応	
日時	平成22年10月2日(土)14:00～16:00
参加者数	21人
講師	柳澤 勤



■高校生という時点での外国人生徒 いろいろなパターン

◇幼少期に来日 ◇小学校高学年～中学校で来日 ◇ダイレクト

それぞれの来日時期における、特徴と日本語学習への影響を具体的に生徒が書いた作文例を見せながら説明。来日時期によって学習に大きな差がでることが分かった。

■母語・継承語

■日本に来た理由・高校を受ける目的

■最近の傾向

■大阪府独自の入試形態～採点者である高校教師の視点から～

■受け入れ高校の態勢～長吉高校の受け入れ態勢～

■特別枠高の入試試験に不合格だった受験生は？～足りない枠校～

■日本語の指導

◇日本語の授業？国語の授業？ ◇教科書 ◇答案の書き方

◇日本語能力試験 ◇どんな日本語が外国人生徒に適切に伝わるか

■多言語によるサポート

◇多言語学校プロジェクトの紹介 ◇ホームページの使い方説明

■リライト教材

日本人生徒と同じ教室で同じ勉強ができることを目指す。

☆リライト教材作りにトライしました。じっくり時間をかけて受講者が個々に取り組んでくださいました。実際にリライトにチャレンジしたあとで、先生がつくられたリライト教材を見せて頂き、リライトのポイントを確認しました。

<受講者の感想より>

➤ 理解度：理解できた 14名 だいたい理解できた 6名

➤ 満足度：満足できた 17名 まあまあ満足できた 3名

・現在高校受験を控えた中学生を担当しているので、先生のお話はとても勉強になりました。

・母語の重要性が分かる作文例がとても印象に残りました。

・リライトをやってみて、思っていた以上に難しいことが分かりました。

・具体的にサイトの紹介があったり、リライトの演習があったりと、とても充実した2時間でした。

第9回 母語支援について	
日時	平成22年10月9日(土)14:00～16:00
参加者数	22人
講師	ヴァニア・アラウジ、グタラ・ディスネル



■ヴァニアさんの体験談

◇相手と同じ枠の中に入る

◇情報の不足

◇サポートについて

・高校生のサポート ・中学生のサポート ・小学生のサポート ・親のサポート

◇お互いのちがいを認められるように…

■ディスネルくんの実体験

◇来日の経緯

◇日本の高校受験～入学

◇勉強の動機づけの重要性

◇親子間コミュニケーション

◇家庭での教育

◇高校生活

◇アイデンティティ

<受講者の感想より>

➤ 理解度：理解できた 14名 だいたい理解できた 4名

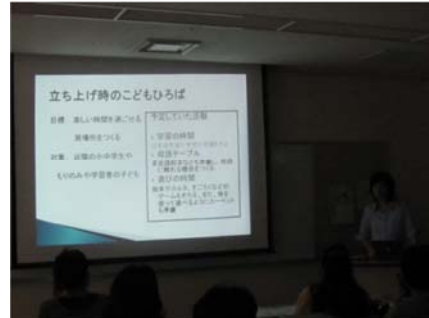
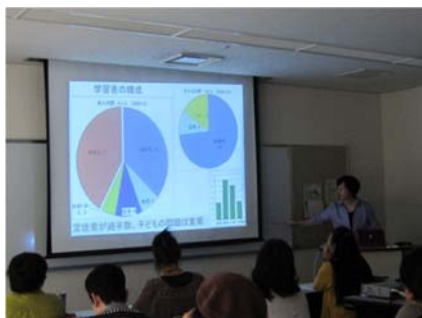
➤ 満足度：満足できた 18名 まあまあ満足できた 3名

・外国にルーツを持つ学生たちの心境が詳しく聞けて少しは理解できた気がします。もっとたくさん
の経験者の話を聞いてみたいです。

・相手の立場になって考える。同じ視点でみる…ボランティアをされていて実感として分かります。相
手の母語を少し覚えて話す途端に表情が緩みます。困難を乗り越え、元気に生活しておられるお二
人に勇気をもらえました。

・ボランティアをしていく上で参考になることが多かった。

第10回 外国からの子どもへの支援の具体化	
日時	平成22年10月16日(土)14:00~16:00
参加者数	22人
講師	コーディネーター：中村満寿央 ●サタデイクラス（坪内好子） ●にほんごサポートひまわり会（斎藤裕子） ●YWCA 多文化子どもプロジェクト（宮崎祐） ●こどもひろば（鵜飼聖子）



- にほんごサポートひまわり会教室紹介
- YWCA 多文化子どもプロジェクト教室紹介
- こどもひろば教室紹介
- サタデイクラス教室紹介
- 各教室の活動に関する質疑応答
- ◇運営者について ◇立ちあげについて ◇子どもたちの学年について
- ◇ボランティアに求めることは? など
- 修了証授与
- ボランティア登録会・個別相談会

<受講者の感想より>

- 理解度：理解できた 12名 だいたい理解できた 7名
 - 満足度：満足できた 7名 まあまあ満足できた 11名 どちらともいえない 2名
 - 講座全体を通しての満足度：とても満足できた4名 満足できた14名 無回答 2名
 - 役にたちましたか？（経験者7名に対して）：
大変役に立った 3名 役に立った 3名 どちらともいえない 1名
 - 実際に活動してみたいですか？（未経験者13名に対して）
ぜひ活動したい 12名 無回答 1名
- ・ボランティアする場所はたくさんあることが分かりました。自分ができることから少しずつ何かできたらいいなと感じました。もっといっぱい講習会などのチャンスがあればうれしいです。
- ・4つの子ども向け日本語教室のお話を聞いて、同じ教室でもそれぞれに集まってくる子どもや活動内容に違いがあるのを知って、とても役に立ちました。
- ・三ヶ月間お世話になりありがとうございました。興味ある内容を実際各回共詳しく教えて頂き、この知識を無駄にしない為にも少しでも関わられたらうれしく思います。
- ・活動したいが（大阪市の子ども向け日本語教室は）4ヶ所とも居住地から遠い。交通費自己負担なので、毎週行くと結構な金額になるのが考えてしまう。